

エコトープ概念に立脚した環境教育プログラム 「釧路湿原プラン」について

生方 秀紀

UBUKATA Hidenori

北海道教育大学釧路校

環境教育、カリキュラム、問題解決、景観生態学、エコトープ、湿原

1977年にトビリシで開かれた環境教育に関する国際会議UNESCO-UNEP会議では、環境教育によって学習者に身に付けさせるべきこととして、意識性 (awareness)、知識 (knowledge)、態度 (attitudes)、技能 (skills)、参加 (participation) の5項目が上げられた。これらの目標はベオグラード憲章とならぶ環境教育の指針として日本でも広く受け入れられている。これら5項目のうち、知識および技能については、教師側があらかじめ用意したものを学習者が学ぶことによって身につくものであるが、意識性 (あるいは感受性)、態度および参加については学習者の自発性あるいは主体性といったものが要求される。ところが、多くの環境教育の指導実践例においては、取り扱う環境問題はあらかじめ決められており、ルールはすでに敷かれている場合が多い。

自然環境を切り口とする環境教育の実践のための題材あるいはフィールドの選定において、いかに学習者の意識性を高め、問題解決と参加への意欲や態度を身に付けさせるかが問われる。これに答えるための一方法として、エコトープ概念に立脚した環境教育のフィールドワークのプランニングの観点と、その実例「釧路湿原プラン」を紹介したい。

<環境教育の特徴>

環境教育の特徴は、科学教育と対比した時に端的に理解される。Zoller (1991) は、環境教育は、知ることよりも関係づけ、決定すること、合理的よりも直観的、原子的よりも全体的、唯一の正答よりも最善の解決、科学を説明的よりも技術的に用いる、孤立よりも全体の文脈で扱う、などの諸点で特徴づけられるとした。この観点を自然環境教育のフィールドワークに当てはめるなら、地域の具体的な自然環境あるいは半自然環境、人工環境のそれぞれを全体 (holon) として捉えることが要求される。この要求に答えるのがエコトープ (ecotope) である。

<エコトープとは>

エコトープは、景観生態学における景観単位に相当し、生物圏、土壌圏、地圏、水圏、気圏のいずれの断片をも含む、生物と環境の総合体の一様な最小単位である (Naveh, 1991)。これに対して、生態系 (ecosystem) は、具体的な生物種や環境構造を捨象した抽象的な概念であり、それ自身が目に見える観察対象とはなりにくい。このエコトープには両極端がある。すなわち、一切の人工物がなく、太陽エネルギーを源泉とする景観単位であるバイオトープ (biotope) と、コンクリートで固められ、化石燃料や核のエネルギーに依存し、緑の一かけらもない都市や工業地域の景観単位はテクノロジカルなエコトープ (短く、テクノトープ; technotopeと呼びたい) である。人間が居住する多くの地域はこの両極端の中間に位置するエコトープを形成しており、適切なエコトープをフィールドとした環境教育を行うことにより、人間活動による自然環境への具体的なインパクト (たとえば、自然植生の破壊、水質汚濁、生物の生息状況の変化) に学習者を遭遇させ、問題意識を持たせることができよう。

<エコトープに着目した環境教育のプランニングの観点>

- 1) 学習者がバイオトープに直接分け入ることにより、自然環境の価値を感受できるものであること。
- 2) 環境問題に対する鋭敏な感覚を養うものであること。
- 3) 学習者がエコトープの中での観察を通して主体的に問題発見し、問題解決の道を模索するものであること。
- 4) エコトープの中での観察で発見した環境問題を探る中で、地球規模の環境問題にまでつながりが出てくるものを含むこと。
- 5) 環境問題への関わりを通して、学習者に人間社会における価値観の相違に気付かせ、意思決定の力をつけさせるものであること。

<釧路湿原プラン>

上述の観点に基づいて、演者が開発した環境教育プログラムが「釧路湿原プラン」である (生方, 1994)。このプログラムでは、エコトープとして釧路湿原を選定し、その地形、湿原の形成、植生、昆虫、鳥、酸性雨・霧を題材として扱っている。また、児童・生徒が釧路湿原およびその周辺に生じている変化の原因を探ることを通して、環境問題へと追及が進んでいくように構成した。このプログラムを釧路湿原周辺市町村の小・中・高等学校に送付したところ、いくつかの学校から、「参考になった」、「このままのかたちで (あるいは一部改変して) 実践してみたい」という反応が得られている。

<参考文献>

- (1) Naveh, Z. (Keiny, S. and Zoller, U., eds), *Conceptual Issues in Environmental Education*. Peter Lang, 1991, pp.125-145.
- (2) Zoller, U., *Ibid.* pp. 71-87.
- (3) 生方秀紀 (北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会、編), 『子どもと環境—しなやかな教科教育を求めて—』, 東京書籍, 1994, pp. 252-273.